「悪霊に取りつかれた子を癒やす」　2023年05月19日

イエスはお答えになった。「なんと不信仰で、ゆがんだ時代なのか。いつまで私は、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。あなたの息子をここに連れて来なさい。」その子が来る途中でも、悪霊は投げ倒し、痙攣を起こさせた。イエスは汚れた霊を叱り、子どもを癒やして父親にお返しになった。人々は皆、神の偉大さに心を打たれた。（ルカ９：41～43）

主イエスはペトロ、ヨハネ、ヤコブの三人の弟子を連れて山に登られた。そこで、顔の様子が変わり、衣が白く輝く「山上の変貌」の姿を見せ、死から復活するキリストであることを啓示された。そのキリストはモーセの律法、エリヤの預言を成就する方であることを示された。三人の弟子たちは驚き、感激し、誰にも話すことができなかった。

翌日、四人は山から下りて来た。すると、いつものように大勢の群衆が主イエスを迎えた。群衆の中から、一人の男が叫んだ。「先生、どうか息子を見てやってください。一人息子です。御覧ください。霊が取りつくと、この子は突然叫び出します。霊がこの子に痙攣を起こさせ泡を吹かせ、さんざん打ちのめして、なかなか離れません。お弟子たちに、この霊を追い出してくださるように頼みましたが、できませんでした。」父親は、一人息子を持ち、彼に悪霊が取りつくと痙攣を起こし、泡を吹いて打ちのめした。息子の病状から、今で言えば、癲癇であろう。癲癇は適正な薬を飲めば、痙攣を押さえ、普段通りの生活を維持できる病になっている。主イエスの時代は、異常な症状になるので、悪霊に取りつかれたと受け取られていたことは頷ける。父親は息子の病に悩み抜いてきた。主イエスの宣教団は、病を癒やしてくれると聞いたので、すがる思いで、弟子たちに癒しを求めた。弟子たちは、癒しの権能を与えられていたので、今までは、十分な働きをしてきた。父親の求めにも応じられると癒しを試みたに違いない。ところが、癒やせなかった。父親は絶望したであろう。そこへ、山から下りて来られた主イエスを認め、走り寄り、癒やしを大声で懇願したのである。

主イエスは「なんと不信仰で、ゆがんだ時代なのか。いつまで私は、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか」と答えられた。あなたがたとは弟子たちのことである。弟子たちの不信仰にいつまで我慢しなければならないのかと嘆いておられる。マルコ福音書は、ルカ福音書では省いている二つのことを書いている。一つは、父親は主イエスに癒しを、「もしできますなら、私どもを憐れんでお助けください」と懇願している。主イエスは、「『もしできるなら』と言うのか。信じる者には何でもできる」と言われると、父親はすぐに「信じます。信仰のない私をお助けください」と叫んでいる。もう一つは、弟子たちが悪霊を追い出せなかった理由を聞くと、主イエスは、「この種のものは、祈りによらなければ追い出すことはできないのだ」と答えられている。祈りは、神への全面降伏である。弟子たちは、神への信頼でなく、自分の力で癒やしてやろうと思っていた。その思い上がりによって、癒やせなくなったと書いている。福音書は、息子の癒やしに関し、神への絶対的信頼を諭している。

主イエスが、息子を連れて来なさいと言われ、連れて来られる途中、悪霊は彼を投げ倒し、痙攣を起こさせた。主イエスが悪霊を叱ると、息子は癒やされ、父親にお返しになった。人々は、主イエスを通し、苦しみを憐れんでくださる神の偉大さに心を打たれた。